

- (4) 笛については、「……大将(夕霧)、たちどまり給ひて、御子のもち給へる笛(横笛)を取りて、いみじくおもしろく、吹き立てたまへるが、いと、めでたく聞ゆれば、いづれもく、みな、(源氏の)御手を離れぬ、ものの伝へく、いと二なくのみある」(若菜下・(三)三五四～三五五)、琵琶については、「故六条の院(源氏)の御伝へにて、左のおとど(夕霧)なむ、この頃、世に残り給へる。」(紅梅・(四)二四〇)。
- (5) 「……(紫上の)和琴に、大将(夕霧)も耳とどめ給へるに、なつかしく愛敬づきたる御爪音に、ひき返したる音の、めづらしく今めきて……」(若菜下・(三)三四五)などの記述。
- (6) 阪倉篤義氏校注・日本古典文学大系『夜の寝覚』(昭47)・二九七頁。
- (7) 『物語序説』(昭42・有精堂)中「源氏物語序説」・二四五頁。
- (8) 三谷栄一氏ほか校注・日本古典文学大系『狭衣物語』(昭48)・四五四頁。

玉鬘の人物像

源氏物語における玉鬘の登場の仕方は異色であり、興味深い。少

- (9) 原田芳起氏校注・角川文庫本『宇津保物語』上巻(昭44)・二六九頁。
- (10) 同右『宇津保物語』中巻・一五〇頁。
- (11) 注6に同じ。同書・三六八頁。
- (12) 日本古典文学大系77中の松尾聆氏校注『濱松中納言物語』(昭47)・一九八頁。
- (13) 注8に同じ。同書・一九一頁。
- (14) 横笛巻の対面以前に、落葉宮が夕霧へ示していた反応は、柏木巻において、「ことならばならしの枝にならさん葉守の神の許しありきと」(鶴四九)という夕霧の懸想めいた詠みかけに對し、従姉妹である少将君を介して、「かしは木に葉守の神はまさずとも人ならずべき宿のしづえか」(鶴五〇)という極めて淡泊な返歌をすることぐらいだったのである。
- (岡山大学大学院文学研究科)

久岡和恵

女卷末の八月、六条院が落成する。彼岸の頃に紫上をはじめとして、花散里・秋好が、神無月には明石上が引き移り、六条院は名実共に完成したのであるから、作者がここを舞台に、新たな物語世界

を展開しようとしている事は明白である。さて次の玉璽の巻の冒頭には、「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず」(玉璽⁸¹)という一文が見えている。そしてこの「飽かざりし夕顔」のゆかりとして玉璽が登場する。彼女は常木及び夕顔の巻で「幼き者」「かの撫子」等と描かれたのみで、その後の消息は杳として知れず、父頭中将でさえ「かの撫子はえ尋ね知らぬ」(末摘花³⁴⁷)という状態であった。その玉璽を持ち出して来たのはどういう意味があったのであろうか。

ここで六条院を舞台に新たな物語世界を展開するにあたり、これまでの状況を確かめてみよう。須磨から帰京後榮達³⁴⁸の道を歩み始めている源氏は、秋好を冷泉帝の後宮に入れ、その後見として政治的権力を握った。明石姫君を仲介にして紫上と明石上の対立も一応和解している。源氏の青春のすべてであった藤壺は死に、朝顔の斎院はついに彼になびかなかった。彼は次第に自らの青春の終りを意識するようになっていく。一方六条院は人々を集め、きちんとした秩序で営まれようとしている。従って、今後の問題は、明石姫君の将来と、幼い恋を引き裂かれた夕霧と雲井雁の将来とである。そして源氏は、常に子供の少ない事を嘆き、「すき者どもの心尽くさするくさはひ」(玉璽¹¹⁶)にするような女の子がほしいと思っていたのであるから、玉璽の登場は、源氏の養女として、六条院における新たな恋物語の女主人公たるべく意図されていたのである。

ところで違い筑紫から大夫監の手をのがれて上京して来た女の子という設定はかなり奇抜である。もちろんフィクションであるから作者はどんな女性を用いる事も可能だったわけであるが、このよう

な設定で、他ならぬ玉璽が登場させたのには、それなりの必然性があったのだと思う。それは、「さる御辯」として処理されて来た源氏の性格の一つで、「ゆかり」への執着という面に関係するのではないだろうか。ゆかりへの執着という事はどういう事であらうか。

源氏物語において「似ている」という事は構成上大変重要である。桐壺更衣と藤壺の他人の空似をはじめとして、叔母姪の藤壺と紫上、異腹の姉妹たる宇治大君と浮舟、或いは源氏とその子供の夕霧及び冷泉帝、柏木と薫などいずれも重要であるが、ここで注目したい事は、似ているという事に執着した桐壺帝・源氏・薫等男性側に見られる意識である。彼らはいずれも自分の愛の対象を失った時、或いは思い通りにならない時、その代わりに容姿から性格までそっくりの女性を求めている。すなわち、それと全く同質のものを求めていると考えられるのであるが、それは最も簡単には、親子とか兄弟に遺伝的に見られる現象であり、この意識が更に進む時、源氏のゆかりに対する執着という性格が出て来るのではないだろうか。

源氏について見ると、彼は単に容姿の美しさだけでなく、その女性の心の深さをも重要な美点として認める事ができ、一つの既成概念にとらわれない大きな愛の心を持った人であるから、それぞれの女性に何らかの価値を認めて、心長く世話しようとしている。源氏は六条院の造営にあたって、若い日から色々な形で交渉を持って来た女性たちを一堂に集めて「もちろん井然とした序列のもとに、定位置を定められてであるが」源氏を中心とした理想的な世界を構築している。ここで既に藤壺や六条御息所は亡き人であるが、彼女達

はほとんど同質の価値を持つ彼女達のゆかり、紫上と秋好によって補われている。紫上は藤壺の姪で全く二つに理想的に描かれている。秋好は六条御息所とそっくりという描写はないが、その気配や奥ゆかしい態度、よしある性格、気のおかれるありさまなど、その高貴さは御息所と同質のものと言ってさしつかえあるまい。このようにして源氏は、彼を中心として若き日から次第に作り上げて来た円満な女性達の世界をそのまま保持しようとするのであるが、源氏が生存する限りすべての女性たちが生きている事は不可能であり、不自然である。そこでその一人が欠けた時、彼はそれと同じ価値を持つゆかりによってそれを補充しようとしていると考える事ができるのではないか。

そう考えると、若き日の源氏を取り巻く女性達で、六条院に入るべき価値を持ちながら、今完全に欠けてしまったのは夕顔である。幸い夕顔にはゆかりとして、「かの撫子」があったのであるから、ここに源氏の養女格としての玉鬘登場の必然性があるのだと考えられる。

実際作者は玉鬘の巻では周到な用意のもとに玉鬘の登場をはかる。まず最初に夕顔への気持ちから「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず、心々なる人のありさまどもを、見たまひ重ぬるにつけても、あらましかばと、あはれに口惜しくのみ思し出づ」(玉鬘¹¹)と書かれている。また形見として親しく使っている侍女の右近のことによると「大臣の君の、尋ねたてまつらむの御心ざし深かめるに」(同¹²)、「我いかで尋ねきこえむと思ふを、聞き出でたてまつりたらば」となむのたまはする」(同¹³)、「世

に忘れがたく悲しきことになむ思して、「かの御かはりに見たてまつらむ、子も少なきがさうさうしきに、わが子を尋ね出でたると人には知らせ」と、その昔よりのたまふなり。」(同)のように、源氏が夕顔を失って以来、玉鬘を探し出して養女として後見したい意志を持っていた事がわかる。

さて、今は紫上付きの右近は、玉鬘を見つけた事を、源氏と紫上のくつろいでいる所で報告する。源氏が事情を知らない紫上に憚って右近を制止すると、紫上は「ねがたきに」と言って耳をふさいでしまう。それに続く部分は、

「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」などのたまへば、「必ずさしもいかでかものしたまはんと思ひたまへりしを、こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」と聞こゆれば、「をかしのことや。誰ばかりとおぼゆ。この君と」とのたまへば、「いかでか、さまでは」と聞こゆれば、「したり顔にこそ思ふべけれ。我に似たらばしも、うしろやすしかし」と、親めきてのたまふ。(玉鬘¹⁴)

と記されている。ここで源氏はまず母親似かどうかを尋ねている。紫上との比較は、耳をふさいでいる紫上に対する御機嫌とりであるが、右近の返事から無難な美人であると察している。「我に似たらばしも」とは紫上に実子と思わせておくための冗談であるが、「似る」と言う語はゆかりに執着する源氏らしいことではないだろうか。玉鬘を引き取る事には、もちろん「いたづらに過ぎものしたまひしかはりに、ともかくもひき助けさせたまはむことこそは、罪軽ませたまはめ」(玉鬘¹⁵)と、右近が述べているような因果関係

があるのだが、源氏は表向きに目的として、若者達の恋愛相手になる女の子がいないう事をあげている。一方本心は「あはれに、はかなかりける契りとなむ、年ごろ思ひわたる。かくて集へる方々の中に、かのをりの心ざしばかり思ひとどむる人なかりしを、命長くて、わが心長さをも見はべるたぐひ多かめる中に、言ふかひなくて、右近ばかりを形見に見るは、口惜しくなむ。思ひ忘るる時なきに、さてものしたまはば、いとこそ本意かなふ心地すべけれ」(玉璽117)と述べているように、夕顔に対する深い愛故に、妻妾の一人として夕顔的な女を求めたいのであり、玉璽をひきとればその本意がかなうというのである。玉璽は、源氏にとって、單に夕顔の娘というだけでなく、夕顔とはほとんど同一のものとして意識されていたと考えてよいのではないだろうか。

二

さて、このようにして登場した玉璽は、紫上や浮舟のようにそっくりのゆかりというわけにはいかなかった。まず作者が、地の文で、あるいは源氏や紫上、右近の口を借りて、玉璽と父親、母親と比較した部分をあげてみよう。

①この君ねびとのひたまふままだに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。

(玉璽86)

②母君は、たたいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやきたまへりし、これは氣高く、もてなしなど恥づかしげに、よしめきたまへり。筑紫を心にくく思ひなすに、みな見し人は里

びにたるに、心得がたくなむ。(同111)

③げにとおほゆる御まみの恥づかしげさなり。(同124)

④ほのかに聞こえたまふ声ぞ、昔人にいとよくおほえて若びたりける。(同125)

⑤内の大匠の、華やかに、あなきよげとは見えながら、なまめかしう見えたる方のまじらぬに、似たるなめりと、げに推しはからるを。(同129)

⑥ひとへに、うちとけ頼みきこえたまふ心むけなど、らうたげに若やかなり。似るとはなけれど、なほ母君のけはひに、いとよくおほえて、これは才めいたところぞ添ひたる。(胡蝶167)

●かのいにしへのは、あまりはるけどころなくぞありし。この君は、ものありさまも見知りぬべく、け近き心ざま添ひて、うしろめたからずこを見ゆれ。(同175)

⑧なごやかなるけはひの、ふと昔思し出でらるるにも、忍びがたくて、「見そめたてまつりしは、いとかうしもおほえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりをりこそあれ。(後略)」(同177)

これによると、玉璽は①⑥のようにどちらかと言えば父親似であるが、③の目つきや、④の声、⑥⑧の気配は母親に似ている。また②⑦のように、性格的な面は母親とは違ふようである。特に②は右近の所感であるが、筑紫という環境のせいにしては「心得がたくなむ」とあるのは注目される。すなわちこれは、父親似によることを言いたかったのである。更に⑧の場合、源氏自身が自分の高揚により玉璽を母夕顔に重ねて見ようとしているためでもある。

次に玉璽の特徴となる形容語について考えて行くことにする。最も印象的なのは「をかし」「をかしげ」で十五回ある。「きよら」「きよげ」は六回で、「きよら」の方は二回あり登場から六条院に入る前までである。また「めでたし」七回、「めやすし」三回で、この二語の分布を見ると、登場したあたりに「めでたし」五回、六条院入り前後に「めやすし」三回である。これは六条院に入るにふさわしい資質を持っていることを「めでたし」で印象付け、源氏の目から見ると、田舎から上京したにしては「めやすし」であったのだと思われる。さらに真木柱以後蛭黒にとって玉璽は「めでたし」であった。このように最上級の形容語「きよら」「めでたし」が六条院入り以前に集中しているのは作者の意図として注目されるのではないか。

続いて「きらきらし」「ものものし」及び「はなやか」の三語を見てみよう。「きらきらし」と言うのは、源氏物語全体で十五例、人物に関しては七例。頭中将四、頭中将と夕霧の御族・玉璽・太宰少貳各一である。よって「きらきらし」は何と言っても頭中将の特徴であり、このような語が一回であるが玉璽に使われている事は注意を要する。「ものものし」は全体で二十九例で待遇に関するものが多い。人物に関する例は二十一。頭中将・夕霧各四、光源氏三、左中弁・大夫監・蛭黒・柏木・紅梅右大臣・薫・浮舟の父各一となっており、女性では軒端萩の体つきを空蟬に比べて「ものものし」と言っている他、頭中将の子玉璽・夕霧の子六君に各一回用いられている。よって「ものものし」も玉璽や六君に関する場合、作者が遺伝的な面を充分考慮していたと考えられるのではなからうか。「は

なやか」は全体で九十四例。人物に関するものでは頭中将四、玉璽三、柏木・夕霧・紅梅右大臣各二、その他は、軒端萩・源内侍・葵上・中将の君・夕霧子息・薫・宇治中君各一、夕顔と蛭黒北の方に關しては打消しとなっている。また同じ系統のことばとしての「はなやかさ」三、「はなやぐ」七、「はなばな」二などを見ると、人物に關しては、頭中将に「はなやぐ」二、宇治中君に「はなばな」一となっている。つまり「はなやか」という語は、頭中将に特徴的に見られ、一方玉璽の特徴でもあると言いう事ができる。更に母夕顔については「はなやかならぬ姿」(夕顔²¹)と打消してある事からして、全く父親譲りの美である事がわかる。

それぞれの語のその場面における重要度という事も、考慮しなければならぬ問題ではあるが、このようにまず数量的な点から言って、玉璽は非常に父親似に描かれていると言いう事ができよう。また玉璽に關するこれらの語は、作者が不用意に用いたその場限りのものではなく、他の形容語との關連が充分考慮されており、彼女を特徴的に表現するのに効果をあげている。例えば「ものものし」について考えると、玉璽という人は、「手つきのつぶつぶと肥えたまへる」(胡蝶¹⁸)、「ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつる」(螢¹⁹)、「酸漿などいふめるやうにふくらむにて」(野分²⁰)等とあるように、ふくらとよく太って背も充分あるらしい事がわかる。軒端萩にしろ、六君にしろ、「様体よきほどに」などと描かれており、女三宮などが「ささやかに」と評されたのに比しても「ものものし」にはそれなりの注意が払われているのである。

また「はなやか」についても、玉璽の特徴である「わらわらか」「けちかし」等の明るさと合わせ考えるとよいと思う。「わらわらか」は全体で五例。玉璽三、柏木の琴の音一、鬚黒に関する打消し一である。玉璽に関するものを次に掲げてみよう。

①人さまのわらわらかに、け近くものしたまへば、いたくまめだち、心したまへど、なほをかしく愛敬づきたるけはひのみ見えたまへり。(螢 189)

②まみのあまりわらわかなるぞ、いとしも品高く見えざりける。

(野分 270)

③女は、わらわかににきははしくもてなし給ふ本性……(真木柱 345)

④は玉璽の巻に見える描写「ただ今から氣高くきよら」(88)、「品高くうつくしげ」(88)、「これは氣高く」(111)などと矛盾するが、先に「めでたし」「めやすし」について述べた折に触れたようにこれらはまず六条院に入るための条件としての「氣高き」であった。従って④は「昨日見し(紫上の)御けはひには、け劣りたれど、見るに笑まるるさまは、立ちも並びぬべく見ゆる」(野分 272) という夕霧の感想と合わせて考える時、紫上という最も理想的な女性のいる六条院における玉璽の美の位置付けとして注目されよう。更に父親頭中将に関する描写、「わが父大臣を、人知れず目をつけたてまつりたまへど、きらきらしうものきよげに、さかりにはものしたまへど、限りありかし。いと人にすぐれたるただ人と見えて」(行幸 283)とも比較するなら、玉璽には藤原家の姫君としての位置が充分考慮されている事になると思う。次に「けちかし」は、いわゆる距離の

近さが主であるが、親しみ易さという意味になって性格表現に用いられている例は、玉璽五回、夕顔・臘月夜・近江君に各一回見られる。いずれも、こちらが恥ずかしくなるような高貴さには欠け、どちらかと言えば現代的であり、なびき易い、気おけない人達であると言える。

その他の語では「けざやか」「見まほし」「今めかし」「匂ひやか」「愛敬づき」「うつくし」などがあげられる。このように玉璽は大体において父親似で、性格も容姿も、明るく華やか、陽気で親しみ易い感じで、人をひきつける魅力があり、軽々しく扱われるわけではないが、こちらが恥ずかしくなるような高貴さにはやや欠けている人物である。

ところでこういった華やかで陽気な親しみ易さは、「なつかし」とは多少ニュアンスが違うのではないだろうか。父親中将は華々として、「なつかし」「なまめかし」の面は見られない人であった。ところが玉璽には「なつかし」という例が七箇所あり、「なまめく」も一例用いられている。「なつかし」は、

○むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、(胡蝶 178)

○うち泣きて(中略)はかなげに聞こえないたまへるさま、げにいとなつかしく(常夏 226)

○やうやうなつかしううちとけきこえたまふ。(篝火 248)

○御返り、おほどかなるものから、いとめやすく聞こえたたまふけはひの、らうらうじくなつかしき(藤袴 322)

○答へたまはん言もなく、ただうち嘆きたまへるほど、忍びや

かにうつくしくいとなつかしきに、(同)

などのように、彼女本来の持ち味というよりは、心理的にしつとりさせる他の要因が加わった場合であり、更に言えば、源氏や夕霧の感じ方にも一因がある。つまり「なつかし」と言っても彼女の持つ「けちかし」に意志的なものが加わったためで、本来の「なつかし」とは多少のずれがあるように思われる。また「なまめく」は藤袴の巻に次のような形で見られる。玉鬘の処遇について源氏と夕霧が対話している。夕霧から鋭く本心をさぐられた源氏は、自分を合理化するようもっともらしく説明をつけながら、「(玉鬘の)人柄は、宮(螢兵部卿)の御人にていとよかるべし。今めかしく、いとなまめきたるさまして……」(328)と述べて、身の潔白を主張する。夕霧はそのことばに「御気色はけざやかなれど、なほ疑ひはおかる」(329)とまだ疑いを抱いているのである。この描き方を見ると、源氏のことばがそのまま玉鬘の重要な性格を言いあてているとは言えないのではないか。こう考えると、やはり玉鬘も父親同様「なつかし」「なまめかし」を本来の性格とする人ではないと言えそうである。つまり玉鬘は、生彩があつて、平安朝的というよりは、万葉女性のようなイメージを持つ人であると言えよう。

三

次に玉鬘の考え方や態度について、更に深く検討して見ることにしよう。

○実の親にさも知られたてまつりにしがなと、人知れぬ心にかけたまへれど、さやうにも漏らしきこえたまはず、ひとへに、う

ちとけ頼みきこえたまふ心むけなど、らうたげに若やかなり。

(胡蝶¹⁰⁷)

○苦しうて御答へ聞こえむともおぼえたまはず。いと若々しきもうたておぼえて、(中略)聞こえたまふさまのいとおいらかなれば、(同¹⁷³)

○もて離れてうとうとしきさまには、もてなしたまはざりしならひに、今、あらざりけりとて、こよなく変らむもうたてあれば、なほ御簾に几帳添へたる御対面は、人つてならでありけり。

(藤袴³²¹)

これらの叙述によると、玉鬘は利発で感受性も鋭敏であるが、そういった本心をそのままに出したり、行動に移したりはしない。相手の気持ち、立場、状況を素早く考慮の上、王朝的な美意識に照らしあわせて、見苦しくならないように取り繕っている。また何事に対しても常に「つつまし」く感じて控える事を忘れない。その様子は、或いは「らうたげ」であり「おいらか」である。「らうたし」「らうたげ」は夕顔の特徴であり、玉鬘の、母夕顔似の面であるが、一方特殊な状況におかれた玉鬘の苦悩の姿に見出せるものでもある。

また源氏は、人々には実の娘と思わせておきながら、玉鬘には懸想のふるまいをしているのだが、「かかる筋に、かけても人の思ひ寄りきこゆべきことならねば、心ひとつに思しつゝ、さま異にうとましと思ひきこえたまふ。」(螢¹⁸⁷)と記されているように、彼女は複雑な立場から起こる様々の矛盾を心一つに収めて、思い嘆き、「うとまし」思ひはてたまふにも、身ぞ心憂かりける」(胡蝶¹⁸¹)と

あるように、ついには自らの憂きとして、人の責任にする甘えはない。そして機軸の利いた積極性もあり、何とか置かれた状況を自分で解決しようとする心遣いもできる人である。例えば源氏の懸想に對して、「かくうたてあるもの嘆かしきの後は、この宮（螢兵部卿）などはあれば聞こえたまふ時は、すこし見入れたまふ時もありけり。何かと思ふにはあらず、かく心うき御氣色見ぬわざもがなと、さすがにされたところつきて思しけり」（螢¹⁸⁰）と描かれているのである。このようにして他の女性なら破綻を起こしそうな所も無難に切り抜けている。

また、このような人ではあるが、さすがに親身に後見してくれる乳母達のことには逆らわない。懸想に關しては、さりげなく「見知らぬさま」にかわし、「まめたち」で相手の反省を促し、或いは「悲しき氣色」をも見せてうまく身を処して、人笑われにならぬようにとめている。その結果「女の御心はへは、この君をなんもとにすべき」（藤袴³³⁸）と源氏にも頭中将にも責められるのである。

こういった彼女の態度はしばしば「らうあり」「かどあり」と評される。「かど」「かどかどし」は全体で三十五例（「かどめき」「かどかどしき」「かどかどしげなり」を含む）、うち人物に關して三十一例ある。玉鬘五、紫上三、源氏・頭中将・夕霧・紅梅右大臣・弘徽殿女御・薫・中君・源氏の孫達・藤典侍腹の子供達・六君各一、その他、木枯女・命婦・一条御息所・薫と匂宮の使い等で、軒端菰と浮舟は弱い肯定、夕顔・末摘花・明石姫君・秋好に關しては否定である。この「かどかどし」については、弘徽殿女御の「おし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて」（桐壺¹¹²）、明石姫君の

「よろづの事に通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、ただたくおほめく事もあらじ」（常夏¹²¹）、紫上の「すこしわづらはしき氣添ひて、かどかどしきのすすみたまへるや苦しからむ」（朝顔¹⁸²）等を考える時、「かど」はあり過ぎたり、表面に出過ぎたりすると、欠点ともなりかねないのであるが、末摘花ほどに「かど」がなくては話にならない。大体においては「かどあり」「かどかどし」の方が優れている。その「かど」が五例あつて玉鬘の特徴である。

次に「らうあり」は勤行の功勞とか骨折り九、巧者なという意味では玉鬘三、柏木一。「らうらうじ」は紫上が圧倒的に多く九、玉鬘・朧月夜・宇治中君各二、玉鬘の娘達・明石上・明石姫君・朝顔・紅梅右大臣・宇治中君各一、六君・匂宮各一で、雲井雁・末摘花は否定、藤壺も否定であるが、「もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど」（朝顔¹⁸³）とあつて、巧者を表面に出さなかったのであろう。このように、「らうらうじ」は「かど」より一段上にあつて、紫上をはじめとする理想的な性格を表わす語である。そして玉鬘は「らうあり」と言われ、紫上に次いで「らうらうじ」という面が描かれ、「かど」は最も多い。

これは幼くより苦勞を重ね、憂き目を見、その苦しみに耐えて来た玉鬘が自然に身につけたものであると考えるのが一番妥当であるが、一方、全く環境のせいばかりとも言えない面がある。夕顔には「かどかどしう、をかしき筋などは後れたりしかども」（玉鬘¹²⁰）と記されていたように、むしろ否定されていた性格であるが、どちらかと言えば父親似の玉鬘の事、性格にも父親譲りと考えられる面がある。父頭中将は、社会的な人物で、形式を重んじ、大宮の扱いなど

に見られるように、多少内面の暖か味に欠ける所がある。また娘達をも立身栄達の道具として意識的に利用しようとする。頑固で融通のきかぬ所があり、善悪のけじめもはっきりさせる。つまり、源氏の優雅な生き方からは多少はずれるような現実的人物と言えよう。しかし又、賢く、政治家としては重々しく、源氏が最も信頼している人物でもある。従って、玉鬘は父親そのままではないが、その利発で巧者な、才走った性格は父親譲りで、それ故に、かような優れた処世術も身につけ得たのであると考えることができる。

四

物語世界の必然に従い、夕顔のゆかりを求める源氏の心に対応する者として登場させられた玉鬘であるが、作者は源氏の思いとは裏腹に、玉鬘を父親似のしっかりした陽気な女性として描いた。この事は、源氏中期の六条院という舞台、すなわち、物語全体の構成と深いかかりを持つ問題である。

第一に、玉鬘は夕顔のゆかりとして、つまり亡き夕顔の位置を補充するために六条院入りをしたと考えた。事実、母夕顔は右近のことはを借りれば「故君ものしたまはましかは、明石の御方はかりのおぼえには劣りたまはざらまし。さしも深き御心ざしなかりけるをだに、落しあおさず取りしたためたまふ御心長さなりければ、まいて、やむごとなき列にこそあらざらめ、この御殿移りの数の中にはまじらひたまひなまし」(玉鬘Ⅱ)というわけで、源氏の愛も深く、少なくとも源氏の立場からは六条院に入るだけの資質が充分認められていた。ところが「いつも春の光を籠めたまへる大殿なれど、心

をつくるよすがのまたなきを、飽かぬことに思す人々もありけるに」(胡蝶Ⅱ)と描かれた六条院であり、また源氏も人々の「心尽くさするくさはひ」にと求めた娘であってみれば、「らうたさ」ばかりで、特別の華やかさも、優れた「らうらうじ」さも見出せなかった母夕顔と同程度の人物であっては、紫上をはじめとして、明石姫君や秋好中宮といった優れた人々の魅む六条院において、源氏の中年期を支えるヒロインにはなりきれなかったと思われる。彼女が父大臣の筋を加え、紫上にも匹敵できそうな優れた女性であった事は、大いに意味のある事であった。

第二に源氏は何と言っても愛の人である。玉鬘が養女であれば、秋好に対する扱いからしても当然、恋愛という面を抜きにして彼女に接する事はできないであろう。かと言って、昔の夕顔のような人を持って来て、簡単に源氏になびいてしまったのでは、若き日の繰り返して、物語的進展がないばかりか、主題である源氏の中年期への成長が描けない事になる。源氏は若き日の奔放な愛の人から、須磨、明石時代を経て、大きく成長している。あだ人性を失ったのではないが、紫上の成長と共に彼女の所に落ち着き、またその心長さで、数多くの愛人達を後見しているのである。そして藤壺の死後、自ら青春が去った思いを抱いているのだから、恋愛にはかわっても、以前の源氏に逆戻りしたのでは不自然である。彼は今、深い反省の心、自制の心を持ち、中年らしい思慮の人になっているのであるが、と書いても気持ちの高揚した恋愛の場面においては、ともするとそれは失われがちである。実際、彼が玉鬘に対する心清きさまを見せる決心をしたのは、紫上や夕霧から鋭く本心をつかれ、どう

しても潔白を証明せざるを得なくなつたからであり、それでも彼は、すっかり玉鬘をあきらめ切つたわけではなかつた。その時、源氏のペースにはまらず、源氏に反省を促し、思慮に訴える事のできる女性でなければならぬ。その意味でも玉鬘には、才走つた巧者な性格が要求されたと思う。

第三に、彼女は結局顔黒のもとに去つて、源氏とは折々の交際を理想的にしている。それはこの局面を打開する唯一の方法だったのかも知れないが、その身の振り方という面においては、さすがの玉鬘も、何一つ意志のままにはならなかつたという事である。しかし、それは王朝貴族世界の姫君としては当然である。その上玉鬘に宮仕えを勧める源氏に対して紫上が「あなうたて、めでたしと見たてまつるとも、心もて宮仕思ひたらむこそ、いとさし過ぎたる心ならめ」(《行幸》288)と述べているように、或いはまた近江君が宮仕えを望んで愚弄されるように、女性が自分の意志をはっきり示すことは好ましい事ではないのであるから、玉鬘が示した以上の意志表示をする事はその意味でも不可能であろう。玉鬘はその限られた自由の中で、最大限に積極的なふるまひを言えるのではないか。源氏の面から見れば、「おのづから思ひ忍びがたき」折々を「あり難く思し返し」(《蜚語》195)て事なきを得たのであるが、玉鬘の側からすれば、よくも「つれなくもてなして過ぐし」(《若菜下》261)たものだと思われる。結婚に関しても意に添わない顔黒に無理に押し入られたのであるが、見事な事後処理で何ら批判を受ける事はなかつた。またこれについては相手にもよるが、例えば空蟬・朝顔・藤壺・大君などのように、何らかの方法で回避する事も不可能ではないと考

えれば、或いはこれが彼女の意志であつたと見なす事もできる。そして、これによつて、この物語世界は破綻を起さず治まっているのであり、母夕顔のような人であつては、このような身の処し方はどうして無理であろう。否、他のどの女性でも、例えば秋好や、女三宮の場合でも同じ結果にはならなかつたと思われる。

以上のように玉鬘という人は、母のゆかりで引き出されながら、その母とは全く異なつた、源氏物語全体でも例を見ない異色な女性として、源氏中期のヒロイン役を無事勤め、源氏と頭中将との仲を取り持つ事にもなつて、若菜の巻で、改めて源氏から賞賛の言葉を受けるのである。

玉鬘が主として登場する巻々に関して、古来、玉鬘十帖と言われ、世に玉鬘系として特別扱いされて来ているようであるが、この十帖は、決して物語の中心からはずれて来ているわけではなく、むしろ中期の源氏の姿を描くという主要なテーマを担うものではなかつたのか。前にも述べたように、夕顔―玉鬘という母娘は、共に六条院に入るにふさわしい資質を備え、或いは源氏の愛を得ていたのであり、「やんごとなき列」にはならずとも、源氏を取り巻く女性達の重要な一角を占めていると考えられる。ところが最後に玉鬘は六条院から去ってしまう。これを真木柱の巻に見られる源氏の落胆の様と合わせ考える時、源氏の理想とした六条院世界は、若菜の巻における女三宮の降嫁を待つまでもなく、すでに崩壊しはじめていると言えるのではないか。この時、源氏世界は、一方で栄華を極めながら、玉鬘のあり方をはじめとして源氏の力でどうにもならない宿命の力に押し流されているという気がするのである。玉鬘の運命は、

一度は源氏の手中にありながら、突如として源氏の手の届かない世に去った母夕顔の運命と共通すると思われる。玉鬘もまた、源氏の手中にありながら、彼のものとならず、源氏に限りない悲哀を残して彼のもたらが去ったからである。

ともあれ玉鬘は生いたちから数奇な運命にもてあそばれながら、生来の性格と、その環境から身につけた優れた処世術を持って登場し、夕顔の娘であるが故の六条院入り、父親の筋を加えての女主人公役を果たし、結局は母夕顔と同様源氏のもとからは去るが、母とは違ってその後は大臣の北の方として良妻賢母ぶりを発揮するのであり、まずまず理想的な幸福を手に入れていると思われる。そしてその姿は、彼女のけ近さと相まって、当時の読者の素朴な羨望を受けたものではあるまいか。

源氏物語の聖

本稿では、聖関係のことば——聖・聖立・聖心・聖地・聖心・聖機・聖言葉——の用例点検を通して、源氏物語の聖について考えてみようと思う。

注

- (1) 犬塚旦氏「源氏物語における理想美の問題」「清ら・清け私見」(『王朝美的語調の研究』昭48)
 - (2) 目加田さくを氏「環境律—玉鬘造形の意義」(『源氏物語論』昭50)
 - (3) 大朝雄二氏「六条院物語の成立をめぐる」(『源氏物語正篇の研究』昭50)
 - (4) 石村正二氏「玉鬘」(『日本文学』昭31・9)
- なお本文の引用は、日本古典文学全集「源氏物語」により、下に巻名とその巻を収める同書ページ数を掲出した。

(岡山大学大学院文学研究科)

小西真智子

聖のもともとの意味は、神に近いすぐれた人ということ、その意味から、儒教的には聖人・高德の人・天皇(の尊称)となり、道教的には神仙・達人の意となり、そして、仏教的には高德の僧の意となったようである。

源氏物語の聖について考えようとする時、直接かわらないもの